

# 服飾造形における基礎要素について

～習得プロセスの体系化という課題～

## Exploration of a systematic approach to fundamental elements in learning processes of garment design

服飾美術学科非常勤講師 長谷川 美香子

### 1. はじめに

東京家政大学（以下、本学）「学校法人渡辺学園」は、明治14年に渡邊辰五郎が本郷区湯島の地に開設した私塾「和洋裁縫伝習所」を前身とする。時代の要請に応えながら着実な発展を遂げ、太平洋戦争終戦を機に、現在の「東京家政大学」「東京家政大学短期大学部」「東京家政大学附属女子高等学校・中学校」「東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園」となって新たなスタートを切った。

本稿で取り上げる講義「服飾造形Ⅰ～Ⅳ」は、創立当初から伝承されてきた「洋裁」の現代版として対応している。本稿の執筆者の実母、祖母、曾祖母ともに本学を出身した経歴を持つ。本学の服飾造形における歴代の真摯なもの造りの精神を感じて育ち、世代を紡いできた。その精神とは、建学から一貫して掲げる継承的な職人技を基礎におく側面であり、実践に重きをおいて技術習得の構造化をはかってきたところにある。執筆者自身も本学卒業後はパタンナーとして活動しており、基礎課程の重要性を体感してきたひとりであると自覚している。

服飾造形は、生活文化と密着して発展してきた分野である。とくに我が国日本では顕著で、伝統的な和装も文明開化以降の西洋服も、記録や製図を遺さぬ女性がおもに担当するものであった。実践による家庭内での技術の継承に依るところが多く、学問的な体系化を成してこなかったともいえる。

階級の大衆文化までの多層や、ハレとケのTPOをも往来し、正統的で単一な研究方法では全貌を捉えきることが難しい。理論が先行するものでもなく、研究者と縫製者という立場の異なる視点からの検討がなされにくいという課題もある。

表題に示した本研究は、執筆者が担当した講義で生まれた疑問点を動機として進めてきた。平成26年度前期「服飾造形Ⅲ」3クラスの成績の比較に注目したい（図1～3）。担当者・内容・配布物が相違なく行われた授業の成績に、なぜ同条件でありながら相互の差異が発生するのか。

採点者サイドが集計するデータだけでなく、学生自身が基礎要素をどのように習得しているかといった当事者意識を含めた実態を知るために、平成26年度前期から（平成27年度前期を除き）アンケートも並行して行ってきた。

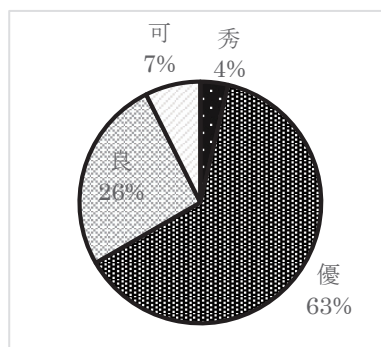


図1 H26年服造Ⅲの成績Xクラス

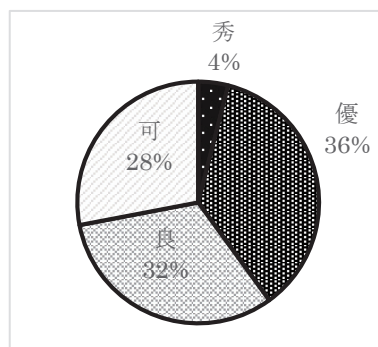


図2 H26年服造Ⅲの成績Yクラス

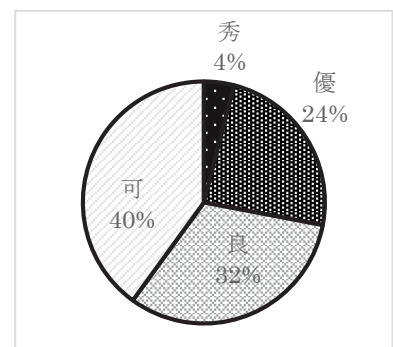


図3 H26年服造Ⅲの成績Zクラス

上記で述べたとおり、本稿は、本学講義名「服飾造形」(以下、本講義)を担当し、非常勤講師5年目から見える課題を、成績と学生へ行ったアンケートの両サイドの分析から整理する。そして、本講義に必要な要素との相関を検証することで、習得プロセスに必要な体系を考える指針を得ることを試みる。

## 2. 服飾造形における要素

本講義での提出作品が完成するために必要な過程は大きく分け3つに分類される。

- 1: デザイン
- 2: パターン (型紙)
- 3: 縫製

本講義ではこの3要素を学習することにより、以下のアイテムを作成し、洋服の製作技術、専門的知識を得る。

- ・服飾造形Ⅰ (以下、Ⅰ) スカート
- ・服飾造形Ⅱ (以下、Ⅱ) シャツ又はブラウス
- ・服飾造形Ⅲ (以下、Ⅲ) パンツとワンピース
- ・服飾造形Ⅳ (以下、Ⅳ) ジャケット

## 3. 基礎要素習得の現状

(1-1) クラス、年度、講義名による成績のバラつき (一貫性がない)

平成25年度前期から平成27年度前期までの本担当講義の成績を円グラフに表した (図4~図28) 凡例は、以下の略式名称とする:

- ・年度はアルファベットと数字のみ、講義名はローマ数字のみとする。
- ・講義名毎の平均点の順位を - (ハイフン) 以下の数字で表す。
- ・配置は各講義名 (Ⅰ~Ⅳ) でまとめ、かつ、左から平均点の上位順とする。

図4~29 服飾造形Ⅰの成績 (平均点順)

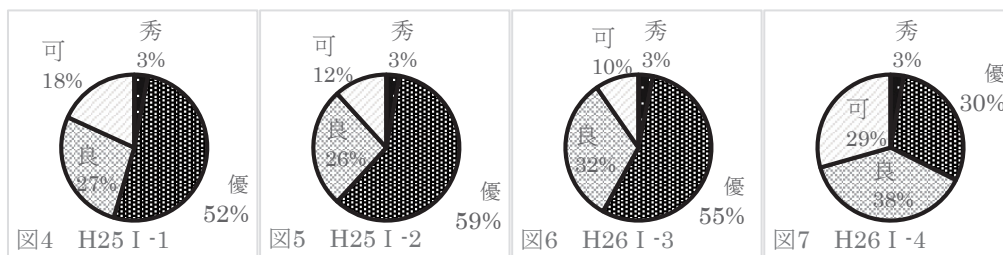
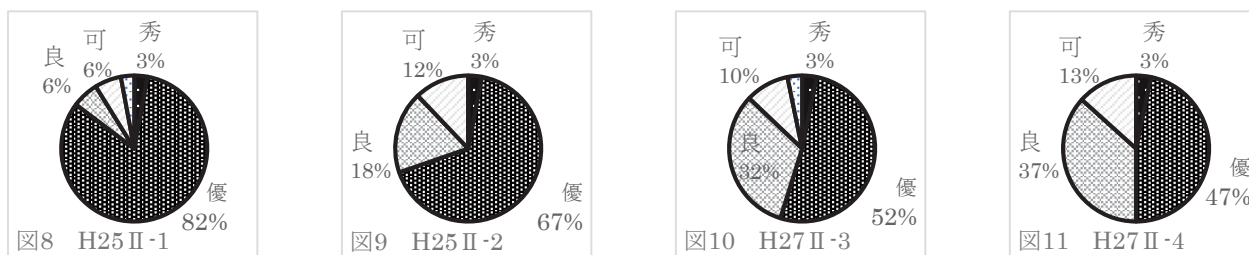


図8~14 服飾造形Ⅱの成績 (平均点順)



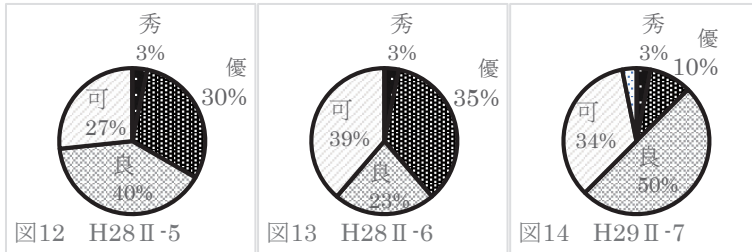


図15～21 服飾造形Ⅲ成績 (平均点順)

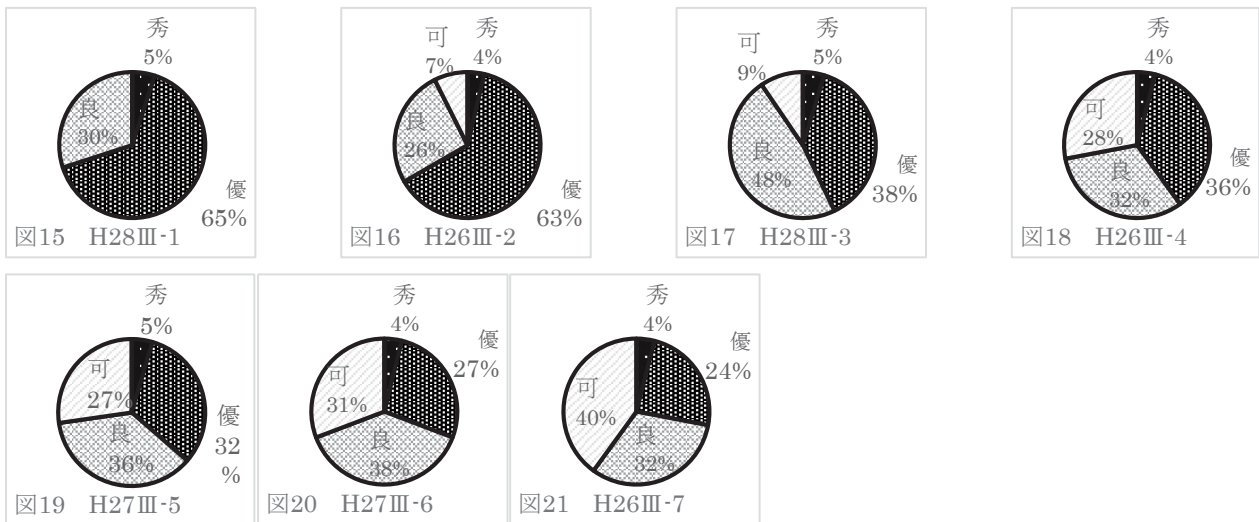
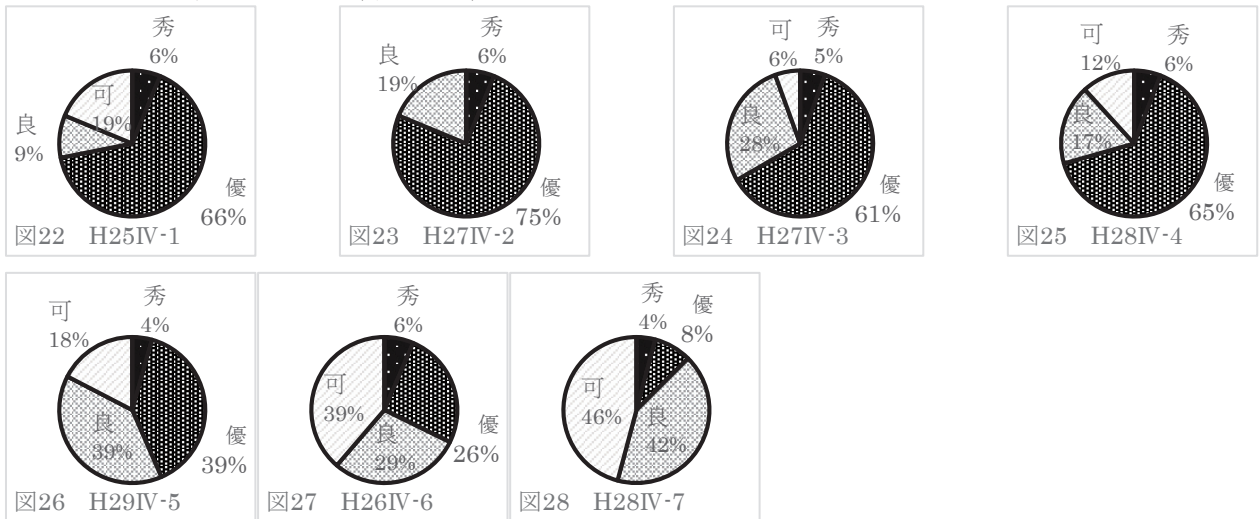


図22～28 服飾造形Ⅳ成績 (平均点順)



(1-2) カリキュラム内容と成績の関係

平成25年度Ⅰの内容は、平成26年度年以降と異なる。(図4～7)

グラフが示す事象の本題へ入る前に特筆事項として2点を挙げておきたい。ひとつは執筆者の本学在学中と比較して、ミシンに慣れていない学生が多くみられたこと。もうひとつは、正確な時間記録はとっていないが、授業外の指導時間を多く設け、授業日程以外にも指導をしなければ、提出期限を守ることが困難だったことである。

<p>平成25年度 服飾造形Ⅰ 提出物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎縫い</li> <li>・ファスナー部分縫い</li> <li>・スカート</li> <li>・ショートパンツ (パターン配布)</li> </ul>	<p>平成26年度以降 服飾造形Ⅰ 提出物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ファスナー部分縫い</li> <li>・スカート</li> </ul> <p>尚 平成26年度から基礎縫いは別講義となった。</p>
---	--

授業の内容量から学生への負荷が多くあったことも考えられるが、それに応じて知識、技術力共に向上した(図4 図5)。さらに応用となるⅡを経て向上した(図8 図9)。

カリキュラム改定前の平成25年度ⅠおよびⅡの2クラスに、優の比率が多い。初期段階での基礎要素習得量が多いほど、応用となるⅡでの成長が見られる。負荷がかかることで人間は必要な技術の習得をし、メンタル面も併せて成長するということが考えられる。

また、(図4と図8)(図5と図9)は、持ち上がりの同クラスである。Ⅰの平均点が高いクラスがⅡでも優の比率が多いことは注目に価する。以下に相関を検証してみる。

### (1-3) 持ち上がりクラスと成績の関係

同クラスでの優の比率の推移を時系列に並べると以下となる。

H25Ⅰ-1が52%、H25Ⅱ-1が82%(図4、8)

H25Ⅰ-2が59%、H25Ⅱ-2が67%(図5、9)

H26Ⅰ-4が30%、H27Ⅱ-3が52%、H27Ⅲ-5が32%だった(図7、10、19)。

H27Ⅱ-4が47%、H27Ⅲ-6が27%であった(図11、20)。

H26Ⅲ-4が36%、H27Ⅲ-7が24%、この二クラスの合同H27Ⅳ-2が75%だった(図18、21、23)。

H28Ⅱ-5が30%、H28Ⅲ-3が38%

H28Ⅱ-6が35% H28Ⅲ-1が65% このⅢ-1とⅢ-3の合同H29Ⅳ-5が39%だった。

上記の結果、ⅠからⅡの推移では、優の比率が増加している。

ⅡからⅢ、およびⅢからⅣの推移では上記の傾向が見られない。

このことは、次に挙げるカリキュラム内容の違いが原因であると推測される。

- ・ⅠとⅡの提出物は1点であるが、Ⅲの提出物は2点である。
- ・ⅠとⅡとⅢは軽衣料であるが、Ⅳは重衣料である。重衣料には軽衣料製作とは全く異なる技術が必要となる。

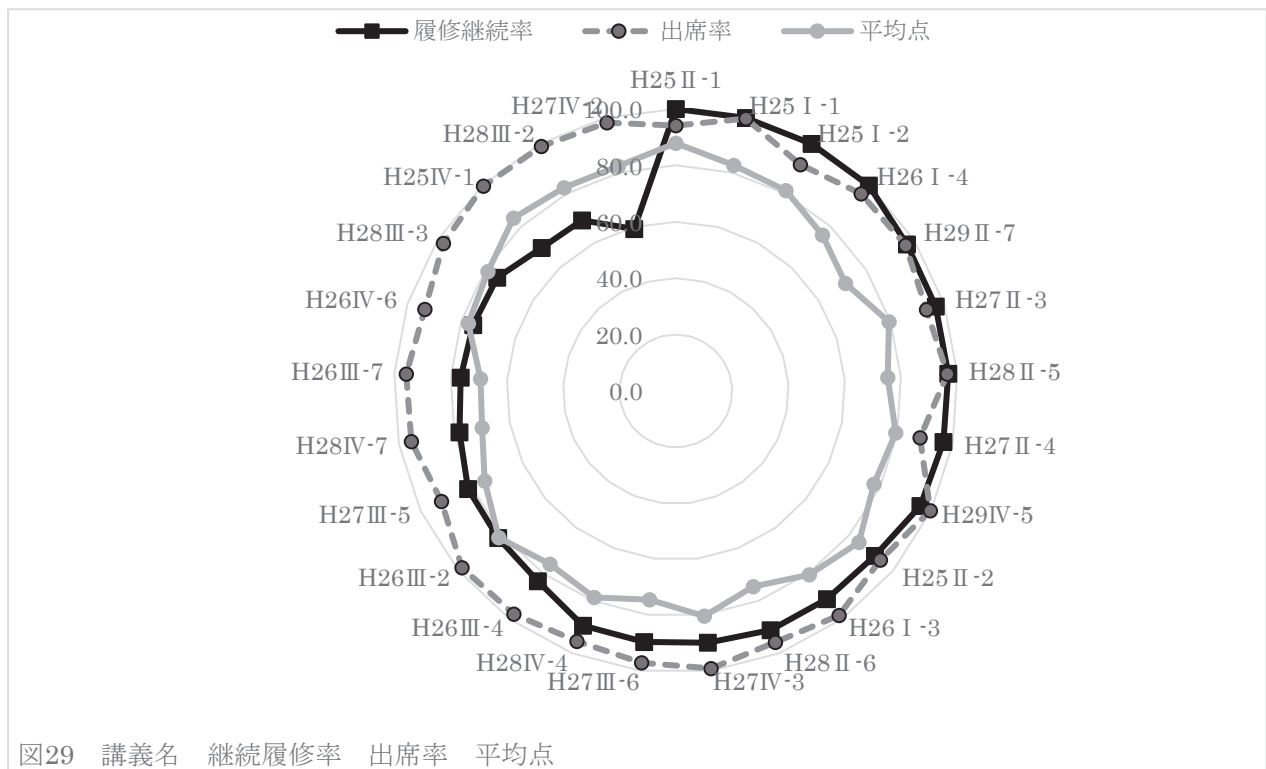
### (1-4) 優の比率が多いクラスの比率

優が50%以上の講義は48%、30%以下の講義は20%だった。

### (1-5) 平均点と優の比率

平均点が高いクラスに優が多かったが、例外もあった(図4と5、図12と13、図22と23、図24と25)。その例外については、年度・講義名等においても明らかな相関は見られず、全体的に一貫性がない。

(2) 講義名と継続履修率



平成25年度前期から平成27年度前期までに受け持った本講義の履修継続率、出席率、平均点をレーダーグラフで表し比較した(図29)。その結果、平均点と講義名、出席率、履修継続率に明らかな相関は見られなかった。また、出席率と講義名、出席率、履修継続率、成績平均点にも明らかな相関は見られなかった。

履修継続率と講義名についてのみに、相関が見られた。服飾造形Ⅰ、Ⅱの継続率が高かった。本講義Ⅰ、ⅡとⅢ、Ⅳで異なる点として次の点が上げられる。

- ・本講義Ⅰ、Ⅱは教職必須科目であるが、Ⅲ、Ⅳは選択科目である。
- ・本講義の部分縫いを除いた提出作品数は、Ⅰ、Ⅱで各1着、Ⅲでは2着、Ⅳは重衣料1着である。

このことから、必須科目であるか否かが履修継続のモチベーションとなりうることで、提出数や内容の多さが履修継続率に関連する可能性があることがわかった。

(3) 提出期限に対するモチベーションの不足

平成25年服飾造形Ⅳ(H25Ⅳ-1)講義担当時、課題期限内に提出された作品(部分縫い)は半数以下であった。半数以上を占めた未提出の学生からの連絡は全く無かった。一方、同じ平成25年後期のH25Ⅱ-1、H25Ⅱ-2は1名を除き提出期限が守られ、未提出の学生からは事前に連絡を受けていた。執筆者在学時(1991年~1995年)、提出期限に提出できなかった者は存在しなかったと記憶する。

また、ファッション業界で働く視点から考えると、納期遅れは企業と製品の価値を下げることに直結する。最悪の場合、製品は完成したが納品できない(市場に出せない)ことも起こりうる。流通社会において納期のない仕事は存在しないと考えたほうがよく、将来的にみると提出期限に間に合わない事態よりも、前もって連絡をしないという姿勢のほうが深刻な問題を見受ける。



(4) 素直であるがゆえの弱点

本学学生は、良い意味でも悪い意味でも“素直”である。良い意味では前述(3)の提出期限を守らなかった学生でも、こちらからコミュニケーションをとりさえすれば最終作品の段階ではすべて期限を守って提出できることである。また実際には、積極的に提出期限・社会性・提出物がつそれぞれの意義や意味について講義で説明を重ねて

図30 技術取得に必要な性質

- ① 集める(教わる)
- ② 組み立てる(考える)
- ③ 伝える(作る)

いるために、前述のような連絡がないままの未提出はまれである。期限を守る努力をする、それでもできない場合は今後の対策とともに遅れる旨を伝える。これら基本的な行動を養う素直さ、能力が学生には備っている。つまり本学学生の傾向として毎年感じるこの“素直”という性質は、“指示を形にすること”には秀でる。と同時に、反対に技術取得に必要な性質である②組み立てる(考える)が疎かになりやすい。(図30)例えば技術説明が終わった後に、自身の頭で考えることをしない。また、既に部分縫いで作成しているものに対し、自主的に製作を進めるという発想も起こらない。「次は何をすればいいですか」と教員に質問してくる生徒が多いことにも、悪い意味での“素直さ”が現れている。

(5) 感性(評価基準の理解)

本講義の際、しわだらけの作品を提出する生徒に注意をしたところ「私はしわを気にしないのでこのまま提出しても良いですか?」という返答があった。ファストファッションの台頭により、衣料品の価格破壊が起こった今日の時代性を反映した感性であるといえる。低価格での提供が可能となった背景には、安い縫製工賃、安い素材等が挙げられる。現代の学生は一流の素材、一流の縫製を目にする機会は少ない世代である。評価基準でもある「美しい縫製」「市場価値に見合う縫製」とはなにかという感性を身につける方法が課題である。

4. アンケートから見える要素

(1) アンケートの設問および回答について

アンケートでは、衣服製作のポイントと考えられる設問38項目を設定し、回答は5:自信あり 4:まあ自信あり 3:言葉は知っているが自信はない 2:できると思うがやることがない 1:質問の意味が分からないの5段階とした。尚、平成26年度前期の設問は34項目で、後期に追加された9、30、34、38が欠けている。(図31)

要素名	設問番号	設問内容	図31 アンケート設問(並べ替え済み)
裁断	1	裁ちばさみが使え	
	2	ロータリーカッターが使え	
ミシン知識	3	ミシンの糸調子を調整できる	
	4	ロックミシンの糸を替えることができる	
	5	ロックミシンの糸を最初から掛けることができる	
	6	職業用ミシンを使用できる	
接ぐ	7	合印を付けて縫製している	
	8	合印を付ける間隔について理解している	
	9	磁石定規を使いこなしている	
	10	ロックミシンで上手く縫える	
	11	中縫いの意味が分かる	
	12	「中表」という言葉の説明ができる	
挟む	13	縫い止まりまでの切込みがしっかりできる	
	14	コバステッチについて説明できる	
	15	段ざらいの方法を理解している	
	16	ベルト付け(インサイドベルト使用)ができる	
	17	落としミシンを理解している	

折る	18	三つ折りは出来上がり線から折っている
アイロン	19	縫い代をアイロンでしっかり割ることができる
	20	アイロンでダーツの先を殺すことができる
	21	アイロン使用时には、いつも当て布を使っている
	22	アイロン台のパキュームを使いこなしている
	23	万十を使用できる
	24	袖万を使用できる
	25	袖馬を使用できる
ディテール	26	鉄万を使用できる
	27	フレアーとギャザーの違いを理解している
	28	シャーリングゴム (丸ゴム) を使える
	29	シャーリングテープを使える
	30	シャーリングテープの合印をつけることができる
	31	ギャザーの倍率について理解している
	32	コ型を作成できる
	33	ミシンでのいせ込みができる(押え金の後ろに指を置く方法)
	34	コンシールファスナーを付けることができる
	35	裏地つきでコンシールファスナーを付けることができる (前もって裏地をつける方法)
	36	ファスナー片返し (エフロン) の3 mmの重なりを理解している
	37	剣ボロを作成できる
	38	行って来いを作成できる

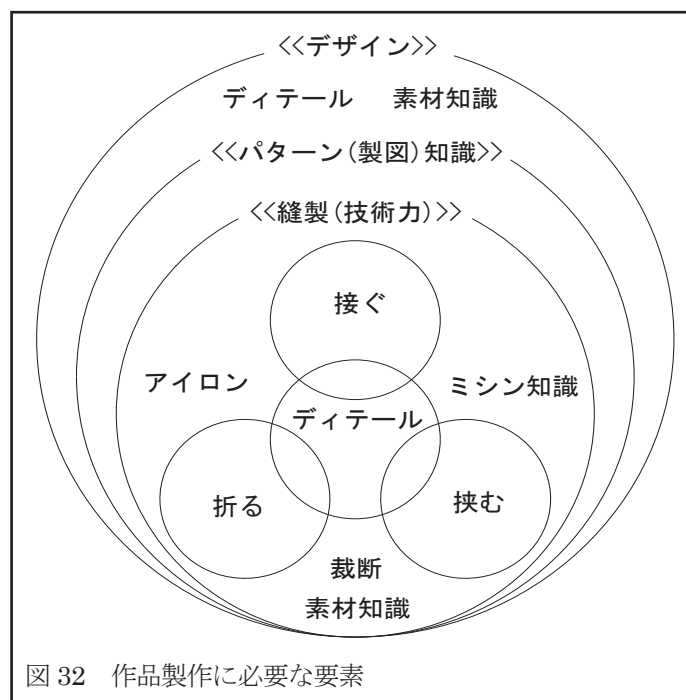


図 32 作品製作に必要な要素

### (2-1) 要素別に見るアンケートの分析 (折れ線グラフ)

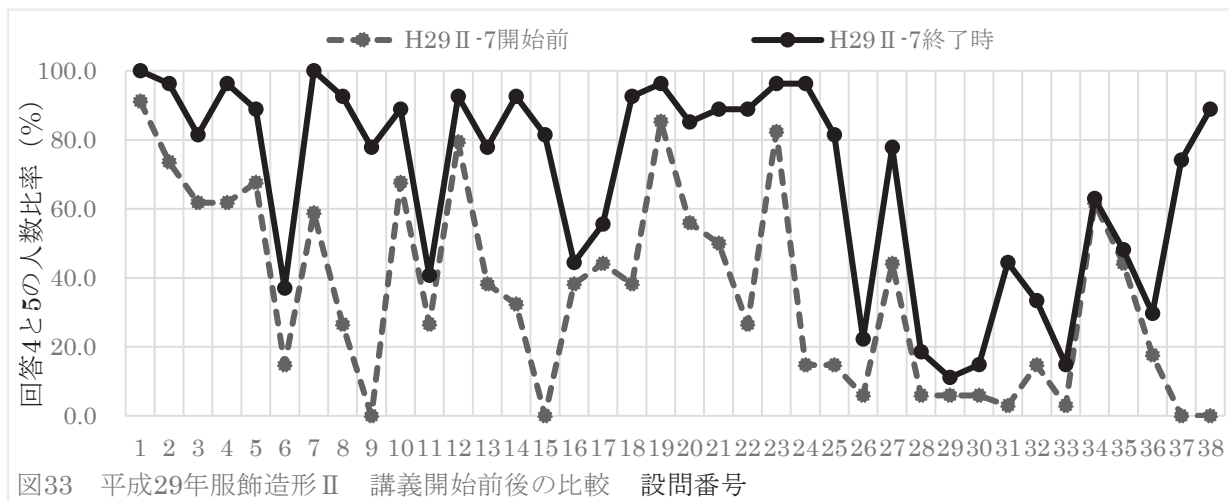
本講義作品提出に必要な要素を集約し、体系の視覚化を試みた。(図32) これに基づき、アンケートの設問を並べ替えた。(図31)

続いて、回答5と回答4を選んだ合計人数の比率を折れ線グラフに表した。全体的に顕著に現れた結果は見られなかったため、本稿では傾向が見られたグラフを選抜し掲載する。(図33～36)

### (2-2) 平成29年服飾造形Ⅱの講義開始前後の比較

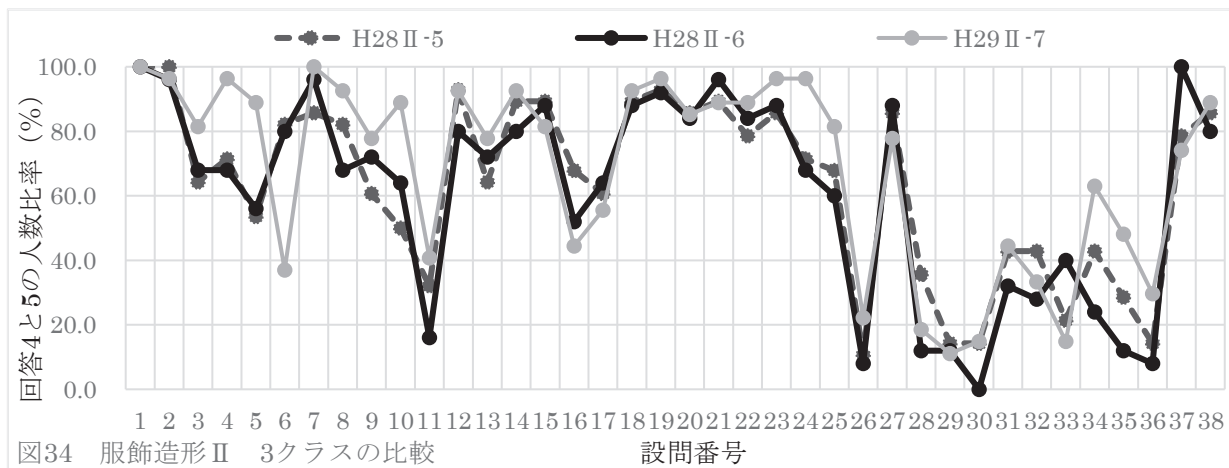
講義開始前・終了後の成長について、すべての項目で開始前を上回り、知識・技術力共に向上したとい

う回答を得た(図33)。「接ぐ(設問7~10)」「挟む(設問13~15)」と「アイロン(設問19~25)」の数値が顕著に上昇している。課題となる袖口部分のディテールである剣ボロ(設問37)行って来い(設問38)における向上が見られた。しかし、服飾造形Ⅱ終了時に身につけているべき要素 中縫いの意味(設問11)ベルト付け(設問16)落としミシン(設問17)ファスナー付け(設問34と36)の数値が低かった。



### (2-3) 服飾造形Ⅱの3クラスの比較

アンケート結果のある服飾造形Ⅱの3クラスを比較した(図34)。各クラスの成績は、H28Ⅱ-5が優30%(平均点75.3点)、H28Ⅱ-6が優35%(平均点74.6点)、H29Ⅱ-7が優10%(平均点71.4)である。

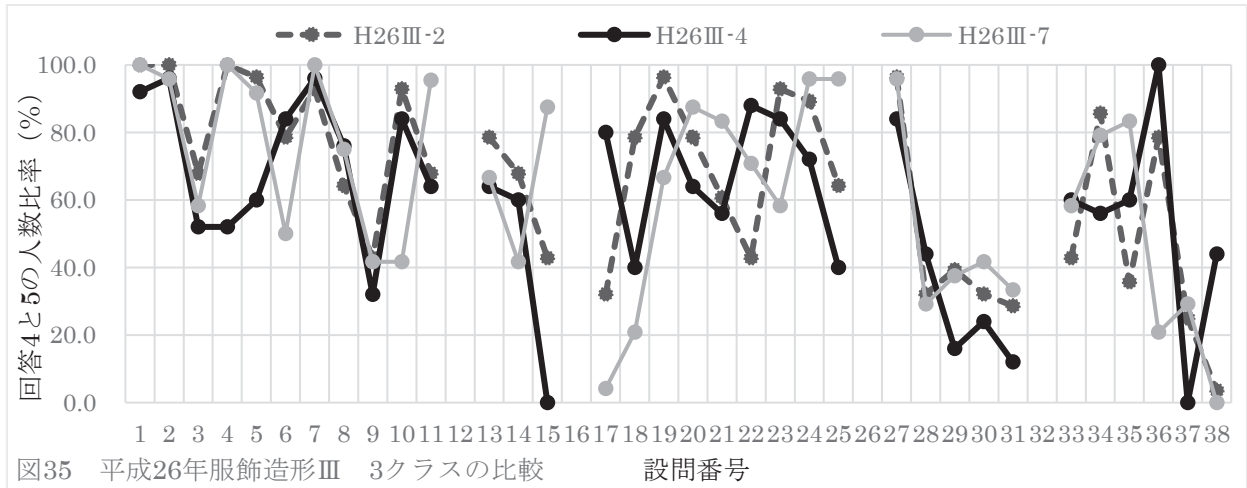


### (2-4) 服飾造形Ⅲの3クラスの比較

本研究のきっかけとなった平成26年度服飾造形Ⅲの3クラスを比較した(図35)。

各クラスの成績はH26Ⅲ-2が優63%(平均点84.3)、H26Ⅲ-4が優36%(平均点79.4)、H26Ⅲ-7が優24%(平均点69.4)である。成績と相関が見られた項目は、職業用ミシンの扱い(設問6)ロックミシン(設問10)、切り込み(設問13)、アイロンでの割り(設問19)であった。





(2-5) 服飾造形Ⅳの6クラスの比較

比較クラスの成績はH27Ⅳ-2が優75% (平均点82.5点)、H27Ⅳ-3が優61% (平均点80.5点)、H28Ⅳ-4が優65% (平均点78.7点)、H29Ⅳ-5が優39% (平均点77.7点)、H26Ⅳ-6が優26% (平均点77.4点)、H28Ⅳ-7が優8% (平均点69.9点)である。成績とのグラフに明らかな相関は見られないが、数値が描く線に注目すると各クラスに特徴が見られる。この特徴について後に考察する。

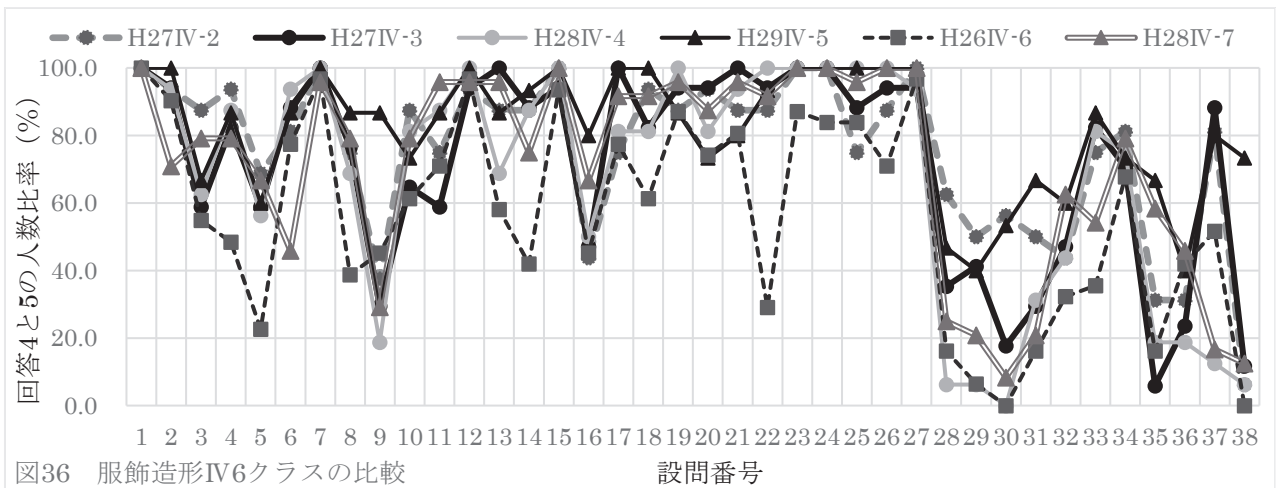
(3) 考察

回答者の主観に準拠するアンケートの性質上、実態と必ずしも一致しないことを考慮すべきではあるが、本講義開始前と終了後の比較において知識、技術力習得の向上がみられた。

優の比率が大きく異ならないH28Ⅱ-5とH28Ⅱ-6の2クラスに注目した(図34)。両クラスの回答数値に大きな開きはなかった。回答数値と優の比率・平均点の差異が少ないことに関連があると推察できる。

この2クラスとH29Ⅱ-7と比較すると、グラフ上で異なる数値を描いている。(図34)

ミシンの糸調子(設問3)ロックミシンでの縫製技術(設問10)に注目すると、成績と内容が反比例している。このことから前述の感性(評価基準の理解)の不足が推察できる。さらに、優の比率が高い2クラスにおいて、職業用ミシンを使用できる(設問6)の数値が高いことにも注目したい。職業用ミシンはその機械としての優位性からも、縫い目が美しい。職業用ミシンに触れる機会が多いことが感性(評価基準の理解)の研鑽を促す手段になると推察する。



H27Ⅳ-2に注目した(図36)。すべての数値が高く、各自のデザインによって習得されるディテールの項目の数値も高い。これらのことから、本クラスは縫製の基礎要素習得率が高いクラスであり、結果として優の比率が高いといえる。

H26Ⅲ-7に注目した(図36)。職業用ミシン(設問6)ロックミシン(設問10)コバステッチ(設問14)落としミシン(設問17)三つ折り(設問18)アイロンでの割り(設問19)万十の使用(設問23)ファスナー付け片返し(エフロン)(設問36)において数値が低い。縫製の基礎要素となる「接ぐ・挟む・折る」の初歩的要素が習得できていないことが、Ⅲの課題となるファスナー付け片返し(エフロン)(設問36)が習得できていないことにも現れる。その結果として優の比率が低いといえる。

また、ディテールに関する設問の中でも、特にデザイン性や専門技術要素の強い設問29～33とファスナー付けに対する習得にばらつきが多くみられた。

ディテールは縫製の基礎要素となる「接ぐ・挟む・折る」の集合である。デザイン性に跳んだアイテムはディテールを多く用いる。そのため、服飾造形に必要な要素習得に適している。しかし、作品は限られた時間の中で完成させる必要があるため、項目1～25を習得しないまま取り組むと時間に追われ、仕上がりが悪くなる傾向が見られる。「ディテール」という要素の前に、「縫製」の基礎要素が重要であるといえる。

アンケート結果を見ていくと、クラスによって習得され易い要素と習得にくい要素がみられる。知識と技術力の向上を目指す方法として、講義開始前にアンケートを行うことでクラスの特徴をつかみ、実習指導に生かすことができると推測した。

## 5. まとめ

### (1) 課題

習得プロセスは、同じ講義内容でもクラス(学生)によって異なっていた。習得プロセスに必要な体系を考えるには、成績の分析と今回のアンケートでは問題を浮き彫りにできなかった。

今後の課題として以下の3点に注目し、解決に向かいたい。

- ・成績の点数配分とアンケートの相関を測る
- ・アンケート項目の検証、統計学の学習
- ・感性(評価基準)を学習する方法

### (2) WhatからHowへ

先に述べたように、服飾造形は実践による技術の継承に依るところが多いため、学問的な体系化を成してこなかったといえる。実践による習得は、感覚的な方法に頼らざるを得ない。例えば「ミシンでまっすぐ縫う」という技術ひとつをとっても、まっすぐなミシン目の知識、ミシンの構造、針の太さ、押さえ金の種類、素材知識(厚み、摩擦)、糸調子、手の位置(どこにおくべきか、どのぐらいの強さで押すのかもしくはささえるのか)、左右に生地を動かす強さや移動量、作業中の視線(見るべき位置)などが挙げられる。このように数多くある要素は、言葉で説明できるものもあるが、指先の感覚で理解していくしかないものもある。現在は大学に入って初めて本格的にミシンに触れる学生が少なくない。習得のプロセスやきっかけとなる要素は、それまでの環境や身体感覚の有無などをベースに、学生一人ひとりで異なる。

本年度に発表された学習指導要領等の改訂のポイントに、「なにができるようになるか」が加わっている。

本稿を執筆するにあたり、学生の知識・技術力の向上を目的としたうえでこの改訂ポイントに触れた。このポイントこそ、何を作るか(What)だけではなく、どう作るか(How)へ注目するきっかけとなった。「何が(What)どう(How)できるようになるか」をセットで捉えていくことで、これまで見えにくかった学生の伸びしろを把握できたことも収穫である。

問われたことに答えることだけが「学び」ではなく、課題を自ら見つけ解決することを「学び」と捉えるとき、作りたいデザインを決定し(課題)、製作必要な要素を習得していく(解決)服飾造形はまさに「学び」といえる。

最後に、アンケートの余白に学生が主体的に記載したコメントを紹介したい。(原文ママ)

「Ⅰ～Ⅲでは洋服の作り方、縫い方を学んだ気がしていましたが、Ⅳでは「本物」や厳しさ、現実を知ったような気がして価値観が変わった気がします。」(平成27年度服飾造形Ⅳ)

「言葉の意味は全くわからなかったけれど、授業を重ねる毎に理解できました。根気を身に着けました。洋服は作った人たちの想いが詰まったものであると思う。一人ひとりのきれいを手助けするもので、そのきれいの追求の面白さを学んだ」(平成27年度服飾造形Ⅳ)

必要な要素を意識しながら講義、実習説明を進めることで、衣服製作の実践がより多くの専門的知識と技術力の向上、そして「生きる力」を身につけることにつながれば幸いである。

謝辞 本稿執筆にあたり、機会を下された教員養成教育推進室の皆様、相談にのって頂いた中島喜和子様、ご指導下さった教授 山田民子先生、アンケートにご協力下さった学生の皆様、担当助手の皆様に深く感謝申し上げます。

#### <引用・参考文献>

- ・ 本学H.P. 学園の歴史と創設者コーナー  
<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/hakubutu/tabid/1353/index.php>
- ・ 学習指導要領「生きる力」改訂のポイント等. 文部科学省  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1384662.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384662.htm)